

プロローグ

あれから一年……あつという間だったな。

結局、俺、つまり中井ケンジと星野美月はスペースアカデミー付属高入学直後のクラス分けで違うクラスになり、しかも違うタイムゾーンで生活する事になった。こうした宇宙都市での8時間差のタイムゾーンは、生活時間こそ、それぞれ重なってはいるが、実際には一方がオフの時間、他方は授業だったりして、ほとんど顔を合わせる事はない。入学直後は、休日に何度か会ったりもしたが、そのうちお互いに勉強などが忙しくなり、ほとんど会えなくなってしまうた。

美月が俺に言ったとおり、授業の難易度は一気に上がった。いまや、ついて行くのもやっとの状態が続いているから、俺も遊んでいる暇がない。あいつが、どうしているのか気にはなつたが、そのうちそんな事を考える余裕もなくなってしまうていた。先日の期末試験だって2科目も追試だ。入試の時のバカ力はどこかに消えてしまったようである。

でもまあ、とりあえず落第は免れ、進級前の休暇に突入。新学期に備えなければいけないので、あまり気も抜けないのだが、今日は久しぶりに街に出てみたわけだ。クラスメイトたちと待ち合わせて遊ぶ約束をしている。

「おーい、待ったあ？」

沢村ケイである。この一年、ケイとは同じクラス。宇宙艇操船模擬実習では、同じチームで訓練を受けてきた。

「あれ、まだケンジだけかあ。皆、遅いなあ」

「そういうお前も5分遅刻だがな」

「いやいや、こんな時だけ早い誰かさんには言われたくない。あ、そうそう、マリナも誘つといたよ。彼女も暇みたいだったから」

マリナ・クレア、あの学年トップの優等生は、あいかわらず試験のたびに先頭に名前が出てくる。彼女は違うクラスなのだが、タイムゾーンは同じだから、よく顔を合わせているわけだ。

「ごめんなさい。待ちましたか？ クラスの友達に頼まれ事をしてたら遅くなってしまっ
て」
マリナがちよつと息を切らせてやってきた。

「だいじよぶだいじよぶ、まだ全員集まってないし」

「あとは、ジョージか。あいつまたゲームにハマってんじゃないだろうな」

「ありうる。ジョージなら、ゆうべは徹夜かも。私が落ちてからまだ残ってたみたいだし」

「まったく、しょうがないな。ちよつと呼び出してみるか」

俺はコミュニケーションを手にとると、ジョージのアドレスを選択して呼び出しをかける。し
ばらくして、眠たそうなジョージの声。

「あれ、今何時・・・え、え、え、悪い。寝過ぎた？」

ジョージ・エイブラムス、こいつも俺たちの同級。エンジニアリング志望の男子。ゲーム好
きなだけじゃなくて、コンピュータやメカにも、やたらと詳しい。ちよつとしたシステムなら
ハッキングだってやってのける。ゲームでは裏技の達人である。こいつも、模擬演習では同じ
チームだった。遅刻と居眠りが玉に瑕ではあるが、よく言えば天才肌、悪く言えばオタクな男
子である。

「おい、またかよ。もう全員集まってるぞ」

「悪い悪い、途中から合流するから、後で行き先だけ教えてくれないか」

「しょうがないな、じゃ、相談して後で連絡するから」

「悪いね。よろしく」

まあ、いつもの事だが、困った奴だ。

「やっぱり寝てたらしい。後から来るから、行き先教えろってさ」

「もう、昨日の夜、落ちる前に念押ししとけばよかったかな。で、どうするの、これから」

「そうだな、マリナはどこか行きたいところとかあるか？」

「私はどこでも・・・」

「あれ、私には聞いてくれないのかな？」

というような会話をしながら、結局は近くのカフェでお茶しながら待つ事にする。たぶんジ

ヨージが来るまで一時間かそこらだろう。

「あれ、君たち・・・」

いきなり後ろから声、見るとフランクがいた。フランク・リービスは附属高の教師である。昨年、俺たちの入学式の日に着任した新米教師だが、本業は恒星物理学の第一線研究者である。着任後、俺たちのゾーン1から8時間ずれたゾーン2の担任になったため、あまり会うこともなかった。ちなみに、研究者という肩書きに似合わず、パイロットとしての腕前も一流、さらに女子の人気ランキングはナンバーワンのイケメン教師だ。

「あれ、フランク先生。こんな時間に珍しいですね。ゾーン2はまだ夜明け前ですよね」

「いや、実は新学期からこっちになる事になってね。そのための時差調整中ってわけさ。まだ時差ぼけ中だがな。君たちはこれからどこかへ行くのか？」

「あ、その予定だったんですけど、一人まだ来てないんで、ちょっとそこらへんで時間を潰そうかと思ってる所です」

「そうか、じゃ、ちょっとお邪魔していいかな。お茶くらいはご馳走しよう」

「やったあ、さすがフランク先生。ゾーン2の一番人気教師っ！」

「おいおい沢村、おだててもそれ以上は何も出ないぞ」

待ち合わせた広場の角にある小洒落たカフェにフランクと一緒に入った俺たちは、この一年の話で盛り上がる。基礎課程1年は勉強中心だが、シミュレータを使った実習では、実際の操船に近い事もやるわけで、その時の失敗談とか、話題には事欠かない。俺たち同級の3人は、お世辞にも優秀なチームとは言えなかったが、チームワークは悪くない。まあ、メンバーも結構気が合ってたわけで、できればこの延長で今年の実機演習も乗り切りたいと思っている。

「ところで、中井、ちょっと頼みがあるんだ。沢村も同じチームならちようどいい」

とフランクが切り出す。

「何ですか、先生、改まって」

「実はな、星野もこっちに来る事になったんだ。新学期からな」

「え、美月がゾーン1にですか？」

「そうだ、ちよっと色々あってな。新学期からゾーン1に移る事になる」

附属高、つまりはアカデミー基礎課程の3年間でタイムゾーンを移動する事は、あまりないのだが、それでも全くないわけではない。定員の問題とかで移動が決まる事もあれば、そのゾーンで何か問題があつて移る事もある。美月の場合は何が理由なんだろうか。

「でも、どうしてまた、今、移動なんですか？」

「そこなんだよ、頼みというのは。中井は知ってると思うんだが、彼女はちょっと特殊なコンポーネント構成を持っている。正直言うと、これから実機演習に入るにあたって、彼女とチームを組める生徒が、ゾーン2にはいないんだ」

「あ、やっぱり……。そういえば、あいつ、中学時代も大変だったとか言ってたな……」

「そうなんだ。で、どうやら中井は星野と相性抜群らしいから、新学期はゾーン1で中井のチームに彼女を入れて欲しいというお願いなんだが。どうだろうか」

「お、ケンジ、下僕復活かあ？ ちよっと妬けますなあ」

「なんだ、中井は星野の下僕なのか。それじゃ、OKするしかないよな」

「おい、やめてくれ。せつかく忘れてたのに……」

そういうながら、俺は少し嬉しかった。この一年間、美月がどうしているのか、実は気になっていたのだから。でも、他のメンバーはどうだろう。

「私もかまわないよ。まあ、新学期のクラス分けで同じになれば、だけどね」

ケイが言う。

「そのへんは、なんとでもなるよ。内緒だけどな」

とフランク。おいおい、そりゃ職権乱用ってやつじゃ……。

「楽しそうですね。羨ましいな」

「だったらクレア君も一緒にするか。役割はかぶってないしな。このメンバーだとメデイカに優秀な生徒がいるってのは好都合だ」

おい、勝手に話がどんどん進んでいるけど、これって……。2年の実習でのチームは、パイロット2名、ナビ1名、エンジニアリング1名、メデイカル1名、そして、コミュニケーション&インテリジェンス(C&I) 1名の構成になる。小型艇一機を飛ばすのに必要なクルーの構成だ。エンジニアリングはジョージ以上の逸材はいないだろうから、ジョージを入れると

して、あとはC&Iだけになる。しかし、このメンバーだと、普通におとなしい奴は大変だろ
うな……。

「エンジニアリングはやっぱジョージだよな」

ケイが言う。そこは全員異論ないだろう。

「ジョージって、ジョージ・エイブラムスの事か？」

「そうです」

「彼はゾーン2の教師の間でも噂になってたよ。なんでも、アカデミーのセンターコンピュ
ータをハッキングしたとかいう話だが、彼も君たちの仲間なのか？」

「そうです。今日は寝坊して遅刻ですが」

「なるほど、彼ならこのメンバーのエンジニアリングとしては、うってつけかもしれないな。
あとはC&Iか。誰か入りたい生徒はいるか？」

「そういえば、C&Iはあまり心当たりがない。1年の時に組んでいたチームには、いなかった
しな……。

「希望者がいないのだったら私にちょっと心当たりがある。女子だがな。彼女もゾーン2に
いたのだけど、ゾーン1に移る事になったんだ。ちょっと変わった娘だが、C&Iとしては優
秀だから、このチームのメンバーとしてはいいんじゃないかな。どうだ、俺に任せてくれない
か」

移動組って、やっぱり美月と同じように、何か問題をかかえてるんだろうか。ちょっと変わ
った、つても気にはなるけど、まあ、ここまでに決まったメンバーだって、マリナと俺を除
けば十分変わってるからな。

「先生、大丈夫ですよ。全員、十分変わってますから」

「おいおい、ケイさん。全員一緒にするのかい？。俺はちょっと異論が……。

「そうだな。じゃ、そこは俺に任せてもらうとして……」

「そこで納得しないで欲しい。マリナもなんとか言ってくれ。」

「なんだか、楽しみですね。皆さん、よろしくお願いします」

・・・って、受け入れてるし。なし崩しに2年の実習チームが決まってしまったみたいだ。しかし、このチーム、いったい誰が仕切るんだ。成績順で言えばマリナだが、どう考えても、おとなしく従わなさそうなのが、約2名。こりゃ、リーダー選びからしてモメそうだな。

「で、リーダーだが、ここはひとつ、中井にやってもらおう事にしようか」

「ええ、なんで俺ですか？」

「いや、パイロットだしな、それに下僕として、星野の面倒を見るには、ちょうどいいポジションだと思うんだが？」

・・・下僕って・・・

「異議ありません、先生っ」

「私もケンジ君でいいと思います」

「そうか、女子二人の推薦がついたら、中井も男として断れまい。じゃ決まりだな」

・・・これは、欠席裁判よりもひどい決め方のような気がするのですが・・・

「さて、めでたく決まったし、これで俺の用事も終わったから、そろそろ退散するでしょう。邪魔したね。ここの払いは済ませておくから、ゆっくりしていくといい」

そう言い残すと、フランクはさっさと、店を出て行く。いったい、なんだったんだ。なんとなく待ち伏せにハマられたような気分なんだが。ケイとマリナは楽しそうだな。新学期の事をあれこれ話している。俺はそれを聞きながらちょっと憂鬱だ。はたして、このチーム、俺に仕切れるんだろうか。跳ねっ返りが2人、優等生と天才オタクが一人ずつ、あと、ちょっと変わった謎の女子。

「どうしたのさ、暗いよ、リーダー」

「いや、ちょっと気が重いだだけだ」

「どうして、なんか楽しそうじゃないの。こんなチーム他にはいないよ。きっと」

「そうですね。楽しいチームになりそうです」

いや、だから俺は気が重いのだが……。やがて、ジョージが寝癖の残った頭で現れて合流。話を聞かされて驚きもせず、そりゃ面白いな、攻撃力高そうだし……。だって？ ゲームのパーティーじゃないんだから……。攻撃力は高いかもしれないが、防御はどうなんだ……。一発ヒットしなきゃ、全滅しかねないっての。さておき、それからその日は4人であちこち遊びに行つて、日が暮れた。